

校長室だより		令和5年10月10日発行
共学共高	第	発行責任者
	56	白梅学園高等学校長
	号	武内 彰

進路希望の実現へ向けて

10月4日(水)に、第3学年の生徒のうち、「指定校推薦」で進学を目指す生徒たちの面接指導会があった。内容は、校長挨拶、進路指導部長からの講話、進路指導部長と第3学年担任団による模擬面接の実施である。

私の挨拶はさておき、進路指導部長からは身だしなみや心構え、指定校推薦の意味・意義などについてお話があった。生徒たちは真剣に耳を傾けていた。実は、私は開始時刻の5分前に会場へ行ったのだが、すでに全員の生徒たちがそろっており、私語一つすることなく着席していた。指定校推薦に臨む生徒たちの覚悟・決意や緊張感が伝わってくる。

模擬面接の対象となる生徒は、学年主任のS先生が指名する。最初に指名されたNさんは、医療系の志望動機などを聞かれ、きちんと受け答えしていた。話す内容もよく考え、まとめられており、立派な内容の受け答えであった。さらに驚いたことには進路指導部長のT先生が、「Nさんは確か面接はなかったのですね・・・」と発言したことだ。何という事でしょう。面接試験はなくても、日頃から志望動機や将来構想をきちんと考えているから、しっかりと受け答えができるのだ。近い将来に私が老いぼれたら、Nさんの勤務する病院へ行くことにしよう。そのときは、よろしくお願いします。

次に指名されたのは、Iさんだ。着用していたサマーセーターを脱ぎ、椅子に向かう。人文社会系の志望だ。大学でどのように歴史を学びたいのか、将来の志望などを聞かれ、適切に答えていた。ただ、面接官の質問が終わったときに「はい」という受け答えがなかったので、面接終了後に私からアドバイスをしておいた。きりりとした顔つきで、「わかりました。」と答えてくれた。将来は教員志望だという。白梅の教員として勤務する日が来るかもしれない。そのときは、後輩たちのためによりしくお願いします。

実際の試験は11月実施が多いのであろう。これからしっかりと準備をして、悔いのない取組をしてほしいものだ。放課後の校内を巡回していると、生徒同士で面接練習する姿や先生に個別面接をしてもらっている姿が見られる。そうやって、自分の考えを整理し、大学入学後もしっかりと学問探究に向かっていくことのできる生徒であることを面接官に感じ取ってもらいましょう。



私自身は、いわゆる一般試験で大学受験をした。当時の担任の先生から、ある私立大学の理工学部の指定校推薦を勧められたのだが、理学部志望であったことと、母子家庭であったために高額な学費を親に払ってもらっては申し訳ないという思いがあったので、お断りした。結果として、第一志望の大学には合格できなかった。授業や学校の成績という点ではよかったが、それよりもハードルの高い応用力・発展的な力が問われる個別学力試験に対応するだけの十分な力を身に付けられなかったからだ。「真面目に努力しても社会には報われないのだな。」と未熟な若者の身勝手な論理を振りかざし、気持ちの面で腐ったりもした。振り返ってみれば、挫折のない人生などないのだから、乗り越えればよいだけの話なのだが、概して青年期は多感な時期だったのだ。同時に、昭和の時代にはいわゆる今のような進路指導というものはなかった。模擬試験は受験していたが、進路は自分で切り開くものであった。

今は時代が違う。どういう大人と関わるかによって、高校生の人生は変わっていくこともある。私たち大人が高校生と関わることによって、良い結果に繋がっていくことも多い。そうした経験知を踏まえて、現代の学校では進路指導が行われているのだ。

国公立大学を目指す生徒は、3月の後期試験まで視野に入れて学びを続けていく。周囲で進路を決めた生徒が出たとしても、しっかりと先を見据えて学びを継続していくしかない。学び続けていけば、最後の最後まで伸びていくのだから。3年生最後の模擬試験の成績判定が悪くても、最後の最後に逆転して希望をかなえた生徒を、私は何人もみてきた。

友人間であるいは先生との個別面談を経て、最終的な確認のために校長室を訪れてくる3年生もいる。明日が面接試験だという。志望大学・学部・学科とアドミッションポリシー（大学が求める学生像）などを確認して面接練習を行う。ほとんど完成形に近くて問題がないレベルだ。自信をもって本番に臨んでくれればよい。

これからも白梅生の進路希望の実現へ向けて、教職員と共に応援していく。

（共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す）